

中国・深圳華僑城テーマパークにおける空間の表象と少数民族若者の日常実践

李 小妹

要 旨

改革開放後の市場経済の導入と大規模な経済開発は、中国の都市社会を大きく変貌させた。東南沿岸部で経済特区が設置され、新たな都市空間が作り上げられた。経済特区第一号の深圳市は改革開放の実験地として 1979 年につくられた。グローバル化する経済への「接続点」として深圳市は、グローバリゼーションと改革開放政策（ナショナル）および香港（リジョナル）との重層した関係性のなかで誕生した。1980 年代に入ってから中国政府は観光開発を促進する方針を定め、香港にある中国政府（国務院華僑事務局）に所属する旅行会社（香港中国旅行社）を深圳に招いて深圳華僑城の開発を委託した。本論文は、深圳華僑城が開発した「錦繡中華」（1989 年 9 月開園）「深圳中国民俗文化村」（1991 年 10 月開園）「世界之窗」（1994 年 10 月開園）という 3 つのテーマパークを中心に形成された都市空間に焦点を当てながら、重層的な空間スケール（ローカル、ナショナル、グローバル）の中に位置づけられた空間の生産とそれをめぐる表象の意味について検討したものである。本論文においては、中国語を中心とした文献の検討に加え、2007 年 3 月と 2009 年 12 月から 2010 年 1 月までの間に行ったフィールドワークにおいて収集したデータを用いている。

本論文では、人文地理学における空間と場所をめぐる議論、とりわけルフェーヴルによる「空間的实践」「空間の表象」「表象の空間」という社会空間生産の三つの契機を軸に、深圳華僑城の都市空間がどのようにして特定の歴史的地理的状况において形成されたのかを検討した。特にその空間にある三つのテーマパークのそれぞれの表象が、どのような時代状況や場所の固有性を通して重層的に決定されたのか、またこれらのテーマパーク空間の生産に関わる様々な主体による空間的实践について述べた。華僑城の都市空間は、テーマパーク化された空間であると同時に「パフォーマンス労働」を提供するパフォーマンス者たちの「生きられた空間」でもある。中国政府、華僑資本、観光企業家、建築家や民俗学者などさまざまな主体が関わり合いながら、人々にナショナルな（中華）国家のイメージを見せるために造り上げた華僑城の都市空間は、同時にグローバリゼーションと都市間競争の中で、都市の歴史を持たない深圳が作り出した固有の「場所」でもある。すなわち華僑城とは、ナショナルな幻想を見せると同時に、都市間競争の中で深圳という新興都市のアイデンティティとしての機能をもつ「場所」でもある。

錦繡中華では歴史的、伝統的コラージュからなる古代中国の伝統空間、つまり社会主義と資本主義との分断を思わせない世界のあらゆる場所に生きる中華人が誇りに思えるような「美しい中華」像が描かれている。民俗文化村では、周縁化された少数民族の文化表象に多数派国民のまなざしを向けることによって、中華民族という「国家」による統一国家でありつつ「多民族国家」であるという固有の中国像はより鮮明な対象として構築されている。深圳民俗文化村の少数民族の演者たちは国家メディアによって作り出された客体化のまなざしに対するダイナミックな受容-対抗のプロセス（自らの他者化された表象を再構築していく過程にお

いて)を生み出す契機にもなる「戦術」を実践している。テーマパークという空間では、国家の表象や観光事業の促進など様々な目的で、少数民族の宗教や文化がスペクタクル(見せ物)化され、商品化されている。しかしそれは一方的な過程(空間的实践)ではない。その中ではステレオタイプ化(他者化)されたイメージが観光客によって消費され再生産されるだけでなく、観光客に眼差される側が時には行為主体ともなるのである。

深圳華僑城のテーマパーク空間は、資本や権力、専門家による「空間の表象」であると同時に、「表象の空間」でもある。深圳市政府から都市計画の権限を取得し、有名な都市計画者を雇い、自らの敷地内の空間を計画建設することは華僑城という空間の实践主体にとって「空間の表象」である。しかし同時に、テーマパークという観光客に向けた空間の中に、錦繡中華というような中国の国家像を表象する空間を構築することは、輸出主導の工業開発が主流の当時の深圳の都市開発環境のなかで、人々の想像力に働きかける「表象の空間」を提示することだったともいえる。このように「空間の表象」を作り出す側が、人々の「表象の空間」を利用し動員するという空間的实践はつねに存在する。深圳の華僑城設立以降、現に中国各地で複製されているテーマパークや遊園地や観光施設は、その多くが華僑城の開発モデルを援用している。深圳は現実に先端的な経済活動が展開される(現代的)都市空間であると同時に、現代性を象徴する記号的な空間でもある。深圳という都市そのものが、いわばひとつのテーマパークのような存在であり、そのテーマ(記号)が、「グローバル化」(の展開)であり、中国の改革開放経済の成功(社会主義体制と市場資本主義的経済様式との「接合」)という物語なのである。

このように「空間の表象」と「表象の空間」は決して二項対立的なものでも固定的なものでもない。深圳の華僑城の都市社会空間は、社会主義の中国政府による経済のグローバル化と国民国家の政治的アイデンティティへの追求の下での空間的实践と、それを規定する観念やイデオロギー(「空間の表象」)の産物である。同時に、テーマパークという観光空間およびポストモダンの都市空間は、人々の想像力に根ざす「表象の空間」を先取して利用するという性格をあわせ持っている。しかしその中で、まだざしを向けられる少数民族の演者たちは、自らのパフォーマンスを創造し、民俗村の規範を逸脱することで抵抗を試みる主体でもあり、その空間は日常実践の中で再生産される「生きられる空間」(「表象の空間」)でもある。このように空間の表象と表象の空間は、空間の实践において相互浸透し合うものである。